

新連載



え？ここって買収されたの？

2000年代からの マイコン半導体ベンダ栄枯盛衰

第1回 日本半導体ベンダの歴史

中森 章 Akira Nakamori

この20年で半導体業界は大きく変化した感があります。巨大なM&A(Mergers and Acquisitions:合併&買収)がいくつも発生し、ちょっと目を離していると「えっ？ここって買収されたの？」という状態になっています。2000年以降の半導体業界が歴史的な流れのなかでどのように変わっていったかを俯瞰するのが、本連載のモチベーションです。

とはいえ、半導体ベンダのM&Aを語る場合、いろいろな切り口があります。この連載では基本的には、自社でマイコンなりSoC(System on a Chip)を開発している(いた)ベンダに着目し、それらのマイコンやSoCのCPUがどのように収束されていったかを述べていきます。第1回の今回は、日本の半導体ベンダに注目してみます。図1に、今回取り上げた日本の半導体ベンダの変遷を示します。

破綻寸前から回復した ルネサス エレクトロニクス

● ルネサス テクノロジ(赤ルネサス)の系譜

2003年、日立製作所の半導体部門と三菱電機の半導体部門が会社分割制度を利用し、互いに約半々の投資を行うことで、ルネサス テクノロジを設立しました。これは、両社のシステムLSI事業の統合という意味があります。これにより、DRAM以外の半導体事業をルネサス テクノロジが行うことになりました。

この時点では、日立製作所製のマイコンや三菱電機製のマイコンはそのままスライドという感じで、マイコンの品ぞろえが2倍になっただけの気がします。2020年の時点では、三菱電機製のマイコンは、16/32ビットのM16CとM32Rが生き残っています。日立製

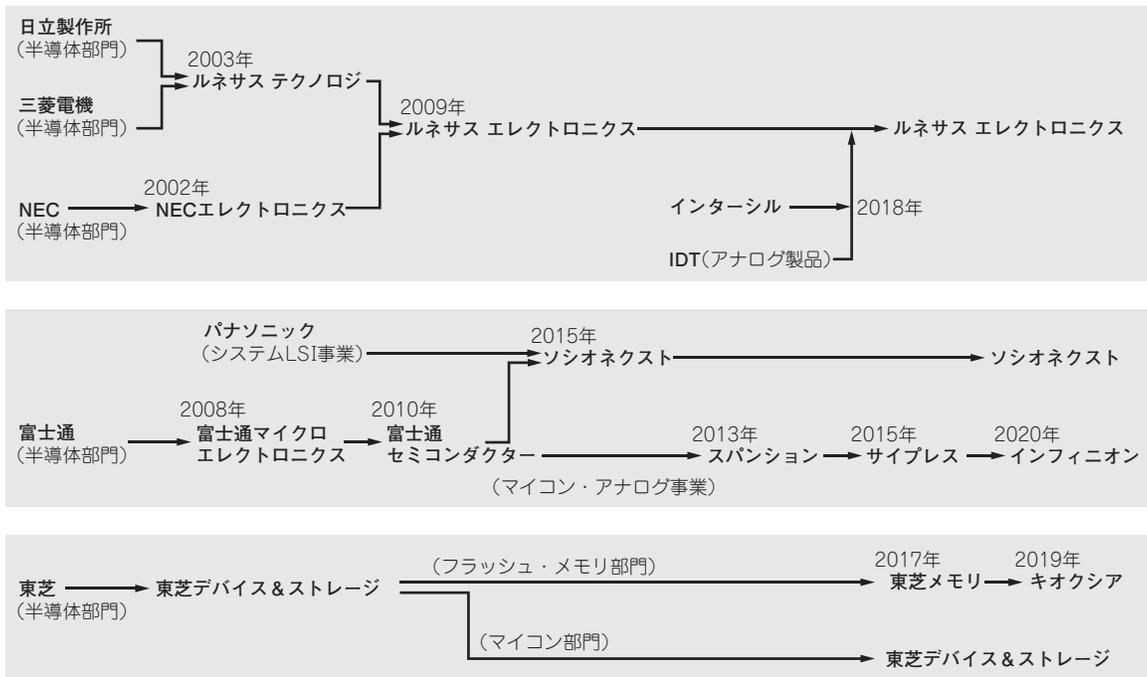


図1 日本のおもな半導体ベンダの変遷